附属札幌中学校「学校だより」

藤　房

北海道教育大学
附属札幌中学校

令和5年3月15日発行

卒業特別号

卒業生の皆さん、ご卒業おめでとうございます。義務教育を修了し、この学び舎を巣立つこの佳き日に感慨もひとしおなのではないでしょうか。皆さんが手にする最後の学校だよりとなる本号では、第 75 期生の門出を祝して、萬谷隆一校長の式辞を紹介いたします。

第７５回　卒業証書授与式　式辞

校長　萬谷　隆一

このたび卒業する 112 名、第 75 期生の皆さん、本当におめでとうございます。また、これまでお子様を育てられてきたお父様お母様方、心よりお祝いの気持ちをお伝えしたいと思います。おめでとうございます。この晴れの日に、私から一言、お祝いとして、これからの君たちのためのメッセージを贈りたいと思います。

1 年生の校外学習で、皆さんと一緒にモエレ沼まで 7 キロの道のりを歩き、山のてっぺんまで登ったり、一緒にお弁当を食べたりしたことが、つい昨日のことのように思い出されます。はや 3 年。今日、卒業する君たちの立派な姿を見ると、君たちは、まだ幼さの残るあの頃から、身も心も大きく育ち、確実に子どもから大人への歩みを進めたのだなと感じ入っています。

君たちの 3 年間は、初めから終わりまでコロナの時代となり、附属中始まって以来の、歴史に残る世代となりました。臨時休校や学級閉鎖もあり、行動や表現に様々な制限があり、大変な日々を経験しました。しかし、そうした困難な 3 年間であったにもかかわらず、君たちは、むしろそれらを吹き飛ばすほどの明るさとエネルギーを発揮して、すばらしい活躍をしてくれました。めげない、あきらめない不屈の明るさに、心から拍手を送りたいと思います。

これから君たちは、校訓にもある「進取」の気質を生かして、いろいろなことに果敢に挑戦し、頑張ってゆく人が多いであろうと感じています。しかし、これからの人生では、もしかしたら困難に直面して、時には不安や悩み、焦りに心が囚われることもあるでしょう。そんなときに自分の心を楽にするは、どうしたらよいのでしょうか。それは、「心の中にもう一つの心をもつ」ことです。それはどういうことでしょうか。私たちは、不安や感情や衝動に駆られているとき、感情に巻きまれているとき、自分を見失います。そして苦しんだり、悩んだりします。そんなときには、心の中にもう一つの心をもってください。一歩自分か

ら離れて、自分に優しく声をかけるのです。「そうなんだね。」「そういう気持ちなんだね」と自分の気持ちに耳を傾けてください。そして「でも君は大丈夫だよ」と自分を優しく励ますのです。ぜひ、これからの君たちには、まずは、進取の気持ちを強くもち、失敗を恐れずに、新しいことにチャレンジしていってほしい。しかし、もし心折れそうになるときには、「心の中にもう一つの心」をもってください。自分の心を受け止め、自分を励ましながら、心を楽にして生きていってほしいと思います。

終わりに、君たちとお別れすることは、とても名残り惜しいかぎりです。名残りとは、平安時代の「なみのこり（波残り）」が変化したものだそうです。つまり名残りとは、波が後に残してゆくものという意味で使われていた言葉で、そこから何かの余韻や影響という意味として使われるようになりました。君たちが一生懸命取り組み、この附属中学校に残したものは、確かな余韻として、後輩たちの心の中に残り、引き継がれて行くことでしょう。君たち第 75 期が、この 3 年間、元気に附属中のまた新たな歴史の 1 ページを創ってくれたことに、心から拍手を送りたいと思います。

君たちの明るい前途、明るい未来を心から祈って、私からの餞の言葉としたいと思います。

■卒業記念品が贈呈されました。

第 75 期生の皆さんから卒業記念品として、ホワイトボードとタッチペン立てが贈呈されました。今後大切に使用させていただきます。また、PTA からは印鑑が卒業生に贈られましたので、紙面を借りて紹介させていただきます。卒業生の皆さん、PTA の皆様、ありがとうございました。

【ホワイトボード】

【タッチペン用ペン立て】

【印鑑】

【保護者の皆様へ】

保護者の皆様におかれましては、これまでの 3 年間、本校の教育活動にご理解とご協力を賜りまして誠にありがとうございました。お陰様で、本日の卒業証書授与式では、校長より一人一人に卒業証書をお渡しすることができました。今後の、お子様の更なる成長を楽しみにしております。お子様のご卒業、本当におめでとうございます。